

日本ブラームス協会 会誌

赤いはりねずみ

ZUM ROTEN IGEL



特集

西原 稔著「《ドイツ・レクイエム》への道
ブラームスの神の声・人の声」の発刊に寄せて

2020
第48号

巻頭言	ノスタルジーの効用	山田豊明	5
論文	ブラームスの《8つの小品集》作品76の研究 ーブラームスのピアノ作品様式に関する考察ー	西原 稔	7
例会	シューマンのピアノ四重奏曲 ーブラームス編曲版(ピアノ連弾)を演奏して	後藤友香理	50
例会	《2020 夏季 DVD 鑑賞会》報告	羽木光彦	54
特集	西原 稔著『《ドイツ・レクイエム》への道 ブラームスの神の声・人の声』の発刊に寄せて 『《ドイツ・レクイエム》への道』目次 『《ドイツ・レクイエム》への道』出版の道のり 書評『《ドイツ・レクイエム》への道』 『《ドイツ・レクイエム》への道』を読んで		55 56 65 76
海外通信	コロナ禍の中のアムステルダム	金丸葉子	82
活動記録	2020 年度	重成 瞳	86
後援・推薦コンサート	2020 年～2021 年	羽木光彦	87
英文目次			90
編集後記			91
入会案内			表 3
扉 絵	回想する晩年のブラームス	染川英輔	
口絵写真	夏季例会 DVD 鑑賞会／№154 冬例会	羽木光彦	

■日本ブラームス協会 No.154 冬例会
 シューマン全ピアノ作品の研究(7)
 「シューマン、ブラームス、ベートーヴェン 250 年記念」
 2020/12/6 (日) 2pm 駒場ピアノサロン

ベートーヴェン/ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 Op.37
 ブラームス/シューマンの主題による変奏曲 変ホ長調 Op.23 連弾
 シューマン/ピアノ四重奏曲 Op.47 ブラームス編曲 連弾版

Japan Brahms Society (JBS) No.154 Winter Concert
 The study of Schumann complete piano works(7)
 Schumann, Brahms and Beethoven 250th anniversary.
 14:00 Sunday, 6 December 2020 Piano Salon Komaba

Beethoven /Piano concerto No.3 in C minor Op.37
 Brahms/Variations on a Theme by Schumann Op.23
 Schumann/PQ. Op.47 for piano 4 hands arranged by Brahms.



(C) JBS



(JBS)

解説 西原教授 Commentator Prof.Nishihara 新型コロナウイルス対策として集客は定員の50%に制限
 The audience limited to 50% of capacity due to Covid-19



(C) JBS

Beethoven /Piano concerto No.3 ソリスト 尼子祐貴 Yuki Amako オークストラ7/ 重森光太郎 Kotaro Shigemori



(C) JBS



(C) JBS

Schumann/Piano Quartet. Op.47 for piano 4 hands.

Secondo 橋本知佳 Chika Hashimoto Primo 後藤友香理 Yukari Goto

ブラームスの《8つの小品集》作品 76 の研究
—ブラームスのピアノ作品様式に関する考察—
A Study in “Acht Klavierstücke” Op. 76 of Johannes Brahms
—An Investigation on the Style of Piano Works of Brahms—

西原 稔
Minoru Nishihara

本論文は、ブラームスが《交響曲第 1 番》作品 68 と同第 2 番作品 73 を完成・初演したのち、ちょうど《ピアノ協奏曲第 2 番》作品 83 と《ヴァイオリン協奏曲》作品 77 の時期に成立した《8つのピアノ小品集》作品 76 が、ブラームスの創作史においてどのような様式的、作曲手法的な意味を持つのかという点について考察することを目的としている。

第 1 章 ブラームスの創作における《8つの小品集》の位置づけ

1 ブラームスの創作の時代区分

《8つの小品集》は多くの課題を内包した作品集である。同じ創作時期に成立した上記の《ピアノ協奏曲第 2 番》と《ヴァイオリン協奏曲》と作曲手法や創作様式の点で共通性を見いだすことは難しい。また、《8つの小品集》のすぐ後に成立した《2つのラプソディ》作品 79 とはどのような関連をもっているのだろうか。

このピアノ小品集がブラームスの創作でどのように位置づけられるのかという点から論及した研究文献はない。マスグレイヴはこの作品集について「作品年代的にも様式的にもブラームスの若い時代の性格小品と後期のゆたかな最盛期との間に位置している」と述べているが¹、彼は実質的にこの作品集の特質については述べていない。さらに、カルベックはブラームス評伝において、この作品集を高くは評価しておらず、彼は「これら一連のバガテルは、特別な作品として出版するためには彼にはあまりに不十分であったであろう」と否定的に述べている²。カルベックが否定的に述べている理由として、シューマンやショパンからの影響を指摘しているが、彼のこの指摘は重要である。カルベックが上記の評伝に記しているところによると、ブラームスは第 8 曲を省くことを考えていた。この点については各作品についての考察において取り上げることにしたい。

この小品集は、単に初期と後期の中間の時期の作品というのにとどまらず、彼の

例会報告

シューマンのピアノ四重奏曲ブラームス編曲版（ピアノ連弾）を演奏して On the Performance of Schumann' Piano Quartet

後藤友香理
Yukari Goto

コロナ下で行われた第154回例会では、2つの連弾曲、ブラームスの《シューマンの主題による変奏曲 変ホ長調》作品23と、シューマンの《ピアノ四重奏曲 変ホ長調》作品47（ブラームスによる編曲版）を演奏させていただいた。ブラームスの作曲した《シューマンの主題による変奏曲》は今回演奏した作品47以外にもう1曲あり、ピアノソロの作品9も同じタイトルである（ただし使用している主題は異なる）。こちらは、平成18年の例会で駒場の「カフェ・アンサンブル」で演奏させていただいた懐かしい曲である。2つの《シューマンの主題による変奏曲》も、《ピアノ四重奏曲（編曲版）》も、ブラームスによるピアノ作品の中では比較的光の当たることが少ない作品といえるだろう。特に《ピアノ四重奏曲》に至っては、今回演奏のお話をいただくまで私はブラームスの編曲版の存在を全く知らないでいた。しかも、調べてみるとブラームスはシューマンの《ピアノ四重奏曲》だけでなく、《ピアノ五重奏曲 変ホ長調》作品44も、ピアノ連弾へ編曲していたという。本稿では《ピアノ四重奏曲》編曲版がどのような状況で成立したのか触れながら、この作品の演奏をレポートしたいと思う。

1854年2月にシューマン自殺未遂の報を受け取ったブラームスがすぐにシューマン家に駆けつけ、家族の精神的な支えになったことは良く知られている。ブラームスは演奏旅行で不在にしがちなクララに代わって、生活の細々とした手伝いをするなど2年もの歳月をシューマン家に捧げているが、その間クララの留守中にシューマンの仕事部屋を使うことを許されていた。そうした機会にブラームスはシューマンの作品に存分に触れ、シューマン研究を行うことができたと考えられる。まず1854年6月、8月に《シューマンの主題による変奏曲》作品9が作曲され、8月から9月の間にシューマンの《ピアノ五重奏曲 変ホ長調》作品44が編曲された。



西原 稔著『《ドイツ・レクイエム》への道 ブラームスと神の声・人の声』の発刊に寄せて

To the publication of "Road to German Requiem
—Brahms and the Voice of Gott and Human Beings" Minoru Nishihara

『《ドイツ・レクイエム》への道』目次

- 序章《ドイツ・レクイエム》とは
- 第1部《ドイツ・レクイエム》とブラームス
- 第1章《ドイツ・レクイエム》を聴く聴衆
～近代市民社会の投影～
- 第2章《ドイツ・レクイエム》の創作過程
- 第3章《ドイツ・レクイエム》のテキストと音楽
- 第2部《ドイツ・レクイエム》への道
- 第1章ブラームスをはぐくんだハンブルクの音楽文化
- 第2章民謡と人の声の思想
- 第3章《ドイツ・レクイエム》とリート
- 第4章ブラームスの古楽研究と宗教作品の創作
- 第5章ブラームスの器楽作品における古様式
 - 第1節初期の対位法書法の作品とシューマンからの影響
 - 第2節ヨアヒムとの対位法学習時代の器楽作品
 - 第3節対位法学習の総括
- 第3部《ドイツ・レクイエム》の意味するもの
- 第1章《ドイツ・レクイエム》の初演と評価
- 第2章《ドイツ・レクイエム》のその後の演奏
- 第3章《ドイツ・レクイエム》後の創作
- 第4章《ドイツ・レクイエム》と19世紀後期の宗教音楽
- 結語ブラームスと《ドイツ・レクイエム》



Contents of "Road to German Requiem"

Introduction What is German Requiem?

I German Requiem and Brahms

1. The Audience of German Requiem—The Reflection of Modern Civil Society
2. The Compositional Process of German Requiem
3. The Text and Music of German Requiem

II The Road to German Requiem

1. The Music Culture in Hamburg and Brahms
2. Volkslied and the Idea of Human Voice
3. German Requiem and Lied
4. Brahms's Study in Early Music and Composition of Religious Works
5. The Stille Antico of the Instrumental Works of Brahms
 - (1) The Early Works of Contrapuntal Style and the Influence from Schumann
 - (2) The Instrumental Works during the Study in Contrapuntal Writing with Joachim
 - (3) The Summary of Contrapuntal Study of Brahms.

III The Meaning of German Requiem

1. The First Performance of German Requiem and its Evaluation
2. The Subsequent Performances of German Requiem
3. The Works after German Requiem
4. German Requiem and the Religious Works in the 19th Century

Conclusion Brahms and German Requiem

新刊本「《ドイツ・レクイエム》への道」出版の道のり
年会誌 43 号論文「ドイツ・レクイエム」他を集大成、2020 年に新刊刊行される
Weg zum einen Deutschen Requiem. Brahms und die Stimme des Gottes
und Menschen. Road to Ein Deutsches Requiem. This book published in 2020 is
based mainly on the paper "Ein deutsches Requiem" of JBS annual journal No.43
/2015 and is enriched by the compilation of all his studies from the past years.

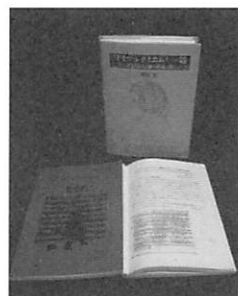
羽木光彦
Mitsuhiko Hagi

2020 年 9 月 10 日に日本ブラームス協会(以下 JBS)顧問
の西原稔先生が掲題のブラームス書を音楽之友社より上梓
されました。ブラームス書に関しては 2006 年に作曲家/
人と作品シリーズ「ブラームス」を執筆されて以来、実に
14 年ぶりとなります。

西原先生には 2002 年に JBS 顧問にご就任頂いてから
「例会コンサート企画にアドバイス」を頂くとともに「ブ
ラームス研究」の成果を年会誌「赤いはりねずみ」に毎年発表頂き、同時に「レク
チャーコンサート」という形式で会員に直接解説して頂いてきました。それは前半
でブラームス論文をピアノと CD で分かり易くお話し頂き、後半はテーマに関連す
る曲を若手ゲストが演奏する形式で別表(2003~2019)のとおり継続してきました。

しかし 2011 年の東日本大震災を受け「若手演奏家支援」を一層強化するために
「レクチャーコンサート」を一時休止して「旧前田侯爵邸・フレッシュコンサート」
に衣替えすることになりました。そして 2016 年まで 6 年間で延べ 37 名の若手に演
奏機会を提供して終了し、2018 年 8 月 19 日の「論文／交響曲 1 番(2019 年会誌掲
載)」から「レクチャーコンサート」を再開いたしました。「レクチャーコンサート」
休止中の 6 年間、会員は会誌に掲載発表された「ブラームス論文」をレクチャー無
しの自力で読解することになりました。

「ドイツ・レクイエム」論文も「レクチャーコンサート」休止中の年会誌 43 号/2015
に発表され、今回大幅に補筆拡充され新刊出版されました。本稿は新刊本の目次に
沿って年会誌 43 号/2015 ほかに掲載された過去の論文がどのように引用、補筆され
ているかをピックアップした初歩的まとめですが、会員の皆さまの新刊本読解のご
参考になれば幸いです。



西原 稔著『《ドイツ・レクイエム》への道 ブラームスと神の声・人の声』
(音楽之友社、2020 年 9 月刊)

Minoru nishihara Road to "Ein deutsches Requiem"
(Ongakunotomosya2020)

関根裕子
Yuko Sekine

我が国の音楽学の第一人者である西原稔氏は、2002 年ブラームス協会の顧問に就任され、そこからブラームス協会におけるレクチャーコンサート企画などと並行して、それまで伝記類はあったものの、作品研究の少なかったブラームス研究に集中された。その最初の大きな成果が、2006 年に上梓された『人と作品 ブラームス』である。西原氏自身が述べているように、同書が次のブラームス研究のスタートとなり、第二の研究成果の総括となったのが本書『《ドイツ・レクイエム》への道 ブラームスと神の声・人の声』である。

たしかに《ドイツ・レクイエム》が中心ではあるが、単なる作品論ではない。ブラームス作品を、とりわけ《ドイツ・レクイエム》を音楽史のなかでどのように位置づけるべきなのか、本作品の「独特の柔和さと人々の共感を呼ぶ」表現の源泉はどこにあるのかという、西原氏がこだわってきた命題の解明が主軸となっている。むしろサブタイトル「ブラームスと神の声・人の声」が示すように、ブラームスの全作品に聞こえる「声」のルーツの探究、歌詞のない器楽曲からも聴こえてくる「言葉」——その言葉は宗教音楽の「神の声」であったり、民謡の「人の声」でもある——の秘密を読み解くという壮大なプロジェクトの成果である。

ブラームスの死生観・宗教観が詰まった《ドイツ・レクイエム》の思想の解明は、日本人にとってはとにかく困難で不利な作業だ。レクイエムといえども、定番のラテン語典礼文によるテキストではなく、ブラームス自身が選んだ聖書の語句が使用されている。ブラームスが各聖伝から抜粋し繋げたテキストで、何を表現しようとしたのかを探るには、19 世紀の市民社会におけるキリスト教の位置づけとブラームス独自の聖書解釈の問題が立ちはだかる。研究者側にキリスト教に関する知識と高いドイツ語解釈能力も求められる。

「《ドイツ・レクイエム》への道 ブラームスと神の声・人の声」を読んで Reading impression of "Ein deutsches Requiem, Brahms"

西本由美
Yumi Nishimoto

1. はじめに

この度、西原稔先生の新刊「《ドイツ・レクイエム》への道 ブラームスと神の声・人の声」が出版されたことを知り、早々に購入手続きをさせていただいたところ、本会誌<赤いはりねずみ>の編集部より、読後感想文の執筆のお誘いをいただいた。本書は私にとって待望の書であり、また必読の書であったのだが、正直「困った」と思った。なぜなら、音楽を生業とせず、学識も経験もない一介の合唱愛好者にとって、このような学術書を読み込んで感想をまとめることは荷が重いと思ったからである。要領を得ない退屈な感想文で本会誌の紙面を費やすのは、返って皆さんにご迷惑をおかけすることになる。どうしたものかと考えあぐねた末、私と《ドイツ・レクイエム》との出会いから、本書を拝読するに至った経緯と、私なりの拙い感想を短く列挙させていただくことで、その責を果たさせていただくことにした。このような訳で、表題と内容に若干の乖離があることはご容赦いただきたい。

2. 《ドイツ・レクイエム》と私

私と《ドイツ・レクイエム》との出会いは半世紀近くさかのぼる。小学生の頃から長年合唱に親しんできた私は、当時所属していた合唱団の30周年記念演奏会で初めて《ドイツ・レクイエム》を歌う機会を得た。それ以前にも、「哀悼歌(nänie)」をはじめとして、「ジプシーの歌」、「運命の歌」、「ミサ曲」など、多くのブラームス作品を歌っており、その美しく重厚な響きに魅せられていたが、《ドイツ・レクイエム》との出会いは衝撃的で、その後の私の人生に大きな影響を与えることとなった。初めて練習に取り掛かった日、歌い出しの8小節「Selig sind, selig sind, die da Leid tragen」の透明で美しい響きに、鳥肌が立つような感動を覚えた。さらに、歌い込

コロナ禍の中のアムステルダム Life in Amsterdam during the corona crisis

金丸葉子
Yoko Kanamaru

今回の海外通信の題材は悩みました。出来れば、新型コロナウイルスの話題を避けて、明るい話題を提供したいと思っていましたが、世界の情勢が深刻になる一方で、新型コロナウイルスが武漢から流行して一年以上経った今も、マスク生活を強いられています（オランダでは感染が広がった期間もマスクをしなかったのが、マスク義務生活になったのは安心です）。

当初は日本でも、コンサートの延期が重なり、多くの人は一年後には元の生活に戻っていると思った筈です。ところが、現在オランダでは変異株ウイルスが猛威を振るい、期待していたのとは違う毎日を送っています。ヨーロッパは新型コロナウイルスの感染が広がり何度もロックダウンがありました。

今、この原稿を書いている最中もオランダはロックダウン中です。必要最低限のものしか買えない日々が続いています。

幸いに、コンセルトヘボウ管弦楽団はロックダウンの最中でも活動を止めていません。無観客のための演奏会を行い、録画をコンセルトヘボウの大ホールで行っています。無観客のための演奏では、当然、収益は赤字です。オランダ政府は文化支援に力を入れているために私達のオーケストラはかなりの額の支援を受けています。これは、本当に有難いことです。ヨーロッパではコロナ禍では無観客コンサートが主流になりましたがアメリカ、特に感染の酷かった東海岸の音楽家、俳優やエンターテインメントにかかわっている人達は本当に大変と聞きました。アメリカのオーケストラの多くはスポンサーや個人からの支援で成り立っている為に、無観客の演奏は成り立たないそうです。コロナが起こる前は、アメリカのオーケストラの方がお給料も良く、条件の良い契約があるように見えたのですが、トランプ政権の最後を見て、国家や政治家の大切さを感じました。こういった危機の場面で国の力が問われるのだと思いました。

(1) 沿革

1973年5月7日ブラームス生誕140年の日にブラームスの音楽愛好家数名の発起人と顧問の故本田脩先生(音楽学)により約30名の会員で「ブラームスの会」を発足させる。その後の活動実績をもとに1979年に名称を「日本ブラームス協会」と改称して現在に至る。例会コンサートは154回また会誌『赤いよりねずみ』は48号を数える。海外ブラームス協会との情報交換も盛んで、最近では若手演奏家の支援にも力を入れている。現在会員数約100名。

(2) 例会コンサート

ブラームスの室内楽曲を中心とし小ホールで客演または会員など第一線で活躍する演奏家によるコンサートを開催。



No2/斎藤秀雄先生と小倉朋子



No78/W・ Kraft氏



No113/Vc林峰男音楽監督

(3) 会誌「赤いよりねずみ」(ISSN 0913-6266)

研究論文、随想、海外情報、協会活動録などからなり、研究者から愛好家までを対象とした国内唯一のブラームス音楽の専門誌で年一回発行している。会誌は会員および国会図書館をはじめ国内音楽大学図書館、海外ブラームス協会に送付されている。また1997年没後100年の記念事業として『ブラームスの実像』を音楽之友社より出版¥2800。

(4) 会報「Botschaft」発行

会員への通信「行事予定」「報告」「推薦コンサート」「新譜CD情報」「会員情報」などの内容でB5版。

(5) 作品研究会/レクチャーコンサート/CD鑑賞会

30名程度の集りで顧問またはゲストによるレクチャー&コンサート、会員をスピーカーとしてCD鑑賞会を開催する。1月の新春新人コンサート、ブラームス映画の鑑賞会などユニークな企画を開催。

(6) 夏季合宿

例会、作品研究会のほかに夏季コンサートまたは夏季CD鑑賞会が1泊2日の合宿形式で怪井沢・八ヶ岳、蓼科、伊豆などで開催される。「夜を徹しての音楽放談」が恒例となっている。

(7) 海外交流

海外のブラームス協会ドイツ、オーストリア、スイスなどブラームスが訪れた各地にあり、例外である日本とアメリカのブラームス協会も活発な活動をしている。「会誌」などの情報交換を行っている。



会誌



海外の協会発行の研究書



CD鑑賞会



会報



ブラームスの実像

(8) 入会と組織・運営

ブラームスの愛好・研究団体として「ブラームスの音楽を通して自由な意見が交わされる場」をモットーに上記の活動を行っております。入会は所定申込書を事務局に送付頂き運営幹事会で受理後、年会費を納入頂くだけで特に愛好家、音楽家などの会員区別はありません。

・組織 顧問/西原稔(桐朋学園大学教授)

会長/羽木光彦 幹事/佐藤元哉、重成隆、杉田忠志、山田豊明

・運営 顧問と幹事会にテーマ毎に会員が加わり審議する拡大幹事会方式で行っています。

・年会費 入会金¥1000 郵便振替口座 00150-5-138721 日本ブラームス協会

● 一般会員 <首都圏> ¥10000 <地方・海外> ¥5000

● 家族会員 <首都圏> ¥12000 <地方・海外> ¥7000

● 学生会員 <首都圏> ¥2000 <地方・海外> ¥2000 四半期毎計算

事務局 〒185-0022 国分寺市東元町2-15-1 Tel/Fax 050-3648-0002